

ルーポ・ディ・フランチェスコ作「モンテカティーニ戦役貴公子達の墓」とフィレンツェ・サンタクロッチェ教会のジーノ・ミケーリ作「パッツィ家の墓」

團 名保紀

ティーノ・ディ・カマイーノは 1315 年、ピサ大聖堂で皇帝ハインリッヒ七世の墓を完成、直後ピサを離れ 8 月 29 日、「モンテカティーニの戦い」にピサの敵たるシエナ軍の一員として参戦した。ギベリン・グェルフ、雌雄を決すべき大戦闘で多数の死者が出たが、中にはピサの僭主・傭兵隊長ウグッチョーネ・デッラ・ファジョーラの息子フランチェスコや、対するナポリ王家のカルロ・ダンジョーも含まれていた。私はティーノがピサ大聖堂の主任棟梁を放擲した後その地位を実質上引き継いだルーポ・ディ・フランチェスコが、1315-16 年に制作した筈の「モンテカティーニ戦没者達の墓」の再現案を 1984 年に試みたが、図示化には至っていなかった。一方カンポサントには古代ローマの石棺を再利用した「フランチェスコ・デッラ・ファジョーラの石棺」が存在することから、ルーポはより本格的な墓を受注し、カッラーラで石材を獲得したものの、まもなく起こった政変により実現されなかった、とする 1933 年のカルリ説が一般に受け入れられてきたのでもある。だが同墓を形成した筈の彫刻要素として、石棺への支えたる四枢要徳を表わすカリアティデの一つ、「正義」(69 センチ)、そして頂上の聖母子像 (66 センチ)、いずれもジョヴァンニ・ピサーノがジェノヴァの「皇妃マルゲリータ・ディ・ブラバンテの墓」の為、1313 年頃制作した同様イコノグラフィーによる大理石像を反映したものを既に私は 1984 年に認定していた。更に今、石棺前面の中央レリーフとして、高さ 66 センチの彩色された「墓における死せるキリスト」(ピサ大聖堂造営局蔵)、又その左右隣と石棺側面に來るべき合計四枚のレリーフ中の三枚としていずれもピサ市内に現存する植物文様による石板を認定、それらを取り込んだモニュメントの再構築図をこの度示し、1315 年の苛烈な戦いの犠牲者達に対しピサが敵味方の隔てなく弔わんとした墓の実在性を強調するものである。

石棺前面中央に「墓における死せるキリスト」が登場するのは、皇帝ハインリッヒ七世の墓の石棺前面で十二使徒が表され、帝墓が「キリストの墓」として認識されたことの反映として理解されよう。そしてルーポ作の墓の石棺で「キリストの墓」が具体的に示されたのを受け、ティーノは直後 1317 年頃完成のシエナ大聖堂の枢機卿ペトローニの墓で、石棺の浮き彫りをいずれもキリストの復活に因む場面とし、ピサのルーポ同様計五枚のパネルをもってした。また石棺の支えもピサ同様に、カリアティデ四体をもってしたのである。そうした流れもあり、シエナ出身のシモーネ・マルティーニによる 1319-20 年の、ピサ・サンタ・カテリーナ教会多翼祭壇画では、最下段の聖人画小パネル群の中央に「墓における死せるキリスト」がルーポの浮き彫り同様のアーチ状枠組みに冠され登場するのである。

やがて 1325 年、ティーノがナポリのカテリーナ・ダウストリアの墓の石棺前面で、聖母と福音書記者ヨハネに囲まれる「墓に於ける死せるキリスト」を表すのを受け、ピサ派の彫刻家ジョヴァンニ・ディ・バルドゥッチョは同様モチーフを 1328 年のサルザーナの「グアルネリオ・デッリ・アンテルミネッリの墓」の石棺前面で示し、墓の上方にはピサのルーポ作の墓同様に、聖母子立像を設置するのである。同彫刻家は 1335 年以降ミラノの「聖ピエトロ・マルティレの墓」で、四枢要徳を表すカリアティデをして石棺を支え、左端には、右手で剣を上向きに掲げる「正義」を置き、まさにジョヴァンニ・ピサーノとルーポが墓で展開したものを繰り返している。その彼は 1330 年代、フィレンツェ・サンタクロチェ教会の「バロンチェッリ家の墓」でもサルザーナ同様に、石棺前面を「聖母マリアと福音書記者ヨハネに囲まれる、墓における死せるキリスト」で飾るが、同モチーフは又同聖堂内に 1340 年代前半設置される「フランチェスコ及びシモーネ・デイ・パッツィの墓」にも反映して行った。そこでは「墓における死せるキリスト」がピサのルーポ作の墓同様石棺前面中央に表されるが、石棺は四枢要徳の擬人像たるカリアティデで支えられ、まさにルーポ作の墓を直接的に反映している。ティーノの彫刻様式に影響された通称「ジーノ・ミケーリ・ダ・カステッロ」なる作者に今日帰される「フランチェスコ及びシモーネ・デイ・パッツィ」の墓であるが、石棺の上にはクライテンベルグが考えるサンタクロチェ教会付属美術館蔵の“ジーノ・ミケーリ”作聖母子レリーフではなく、やはり「ジーノ・ミケーリ・ダ・カステッロ」に帰すべきと私には思われる、個人蔵の高さ 77 センチの大理石製丸彫りの聖母子像、(因みに同像を昨今クライテンベルグは、かつてルーポの協作者であったピサ派彫刻家・ボナイウト・ディ・ミケーレ作としている) が置かれていたものと私は考える。同墓がルーポ作 1316 年の墓をカリアティデ、そして石棺の「墓におけるキリスト」の浮き彫りで反映するのを既に認識したが、ピサのルーポ作の石棺上では丸彫りの聖母子像が存在した筈である限り、フィレンツェでも浮彫ではなく、丸彫りの聖母子像が石棺上置かれた可能性が極めて高くなるからである。因みに二つの大理石製丸彫り聖母子像を比較するとポーズ、表情、衣紋の処理等幾多の点でルーポから“ジーノ・ミケーリ・ダ・カステッロ”への影響が具体的に存在したのに気づかされる。これらをもって再構築されるべきフィレンツェのパッツィ家の墓、その内容を通じてもピサ大聖堂にルーポが 1316 年完成した「モンテカティーニ戦役貴公子達の墓」の影響力の大きさについて認識でき、その歴史的実在性の根拠になると考える。

ティーノ作「皇帝ハインリッヒ七世の墓」、ルーポ作「モンテカティーニ戦役貴公子達の墓」、いずれもが、ピサ大聖堂内に為政者、傭兵隊長であったウグッチョーネ・デッラ・ファジョーラの意向のもと設置された。それらは戦争を背景とした国家的芸術であったが、いずれもダンテの理解者、擁護者であったウグッチョーネにより高い理念のもと遂行され、究極的には世界の「平和」を標榜する普遍的メッセージにより輝くものであった。それ故、ウグッチョーネの 1316 年の追放後もそれらは破壊されることなく存続し、各方面に多大な影響を發揮したものと考える。